平成 23 年度

高校生国際協力実体験プログラム

報　告　書

2011 年（平成 23 年）8 月

独立行政法人　国際協力機構
九州国際センター（JICA 九州）

〒805-8505　福岡県北九州市八幡東区平野 2-2-1
TEL: 093-671-6311
FAX: 093-671-0979

【事業の結果概要】

平成８年度より JICA 九州は、九州の高校生の開発途上国への理解を深めることを目的とした、「高校生国際協力実体験プログラム」を実施しており、今回で 16 回目を迎えた。

九州７県の高校から 21 校の応募があり、選考の結果 17 校、計 40 名（生徒、65 名、教員 17 名）が本プログラムに参加した。事前学習として、JICA 事業の紹介、また参加する生徒の「国際協力」に関するイメージをウェビングにより記述し、プログラムの当日に持参するようにした。

国際協力実体験プログラムの第１回目は８月３日から８月５日、第２回目は、８月 17 日から８月 19 日にかけて JICA 九州において２泊３日の日程で行なわれた。JICA 事業により各国から九州に来ている研修員との交流、開発途上国の料理試食、青年海外協力隊の体験談、開発教育ワークショップ、青年海外協力隊活動プログラム作成体験等を行なった。

生徒、教員に対するアンケートの結果からは、ほぼ全員がプログラムに対して満足していることが伺えた。また、プログラムの最後に再び行なった「国際協力」に関するウェビングの変化から、生徒が開発途上国の抱える問題、国際協力についての関心・理解を深めたことが伺え、「知る」、「考える」から具体的に「行動する」に繋がる良い機会になったと思われる。

なお、アンケートより今回プログラムで経験したクバーラの学校での実施や、国際理解ワークショップなどで学んだ内容を学校祭において発表したいなどの感想をいただいており、参加校の周りの地域住民や、各県の他の学校への波及効果が期待できるものとなった。

【アンケート結果】

・三日間を通してプログラムの内容の満足度は何％でしたか（有効回答数　63 件）

満足度（％）	50 ～ 59	60 ～ 69	70 ～ 79	80 ～ 89	90 ～ 99	100 以上
人数	０人	０人	３人	６人	８人	46 人

上記の表からもわかるように、95％以上の参加者が 80％以上の満足度を示しており、今回のプログラム内容が充実したものであり、参加者の期待に応えられていたことが伺える。

特にプログラムの中でも、協力隊活動プロジェクトの作成は大変印象に残ったようで、実際に活動計画を作成する難しさと同時に、知り合って間もないグループの仲間達と議論をしながらの作業に苦戦しながらも楽しんでいたことが伺えた。知識だけの詰め込みでなく、様々な実体験を通して、プログラムの目的でもある「現状に理解を深める・互いを知り共有する・自分自身を見つめ直す」という事を意識することが出来た二泊三日のプログラムとなった。

＜目　　次＞

１．高校生国際協力実体験プログラム

プ ロ グ ラ ム

第1日目　第1回目：8月3日（水）／第2回目：8月17日（水）

開会式・オリエンテーション …… 1

アイスブレイキング …… 3

ク　バ　ー　ラ …… 6

JICA 研修員との交流・夕食会 …… 9

第2日目　第1回目：8月4日（木）／第2回目：8月18日（木）

焼鳥じいさん体操 …… 13

協力隊体験談 …… 15

国際理解ワークショップ …… 18

青年海外協力隊活動計画作り …… 20

第3日目　第1回目：8月5日（金）／第2回目：8月19日（金）

青年海外協力隊活動計画発表 …… 24

閉会式・ふりかえり …… 26

参加校一覧 …… 29

※別添　・国際理解ワークショップ資料

・「自分への手紙」 一部抜粋

２．参 考 資 料

高校生国際協力実体験プログラム募集要項

平成 23 年度　高校生国際協力実体験プログラム

第１日目　第１回目：８月３日(水)/ 第2回目：8月 17 日(水)

13：00 ～	受付開始
14：00 ～	開会式・オリエンテーション
14：30 ～	レクレーション（アイスブレイク）
15：30 ～ 15：40	休　　憩
15：40 ～ 17：40	クバーラ（＋体験談発表）
17：50 ～ 19：50	JICA 研修員との交流・夕食会
20：00 ～ 20：10	明日の確認

第２日目　第１回目：８月４日(木)/ 第2回目：8月 18 日(木)

08：50 ～ 09：00	一日の確認
09：00 ～ 09：20	レクレーション（アイスブレイク）
09：20 ～ 10：20	協力隊体験談
10：20 ～ 10：30	休　　憩
10：30 ～ 12：00	国際理解ワークショップ
12：00 ～ 12：30	プロジェクト作りの説明
12：30 ～ 13：30	昼　　食
13：30 ～ 18：30	プロジェクト作成
18：30 ～ 18：40	明日の確認

第３日目　第１回目：８月５日(金)/ 第2回目：8月 19 日(金)

08：50 ～ 09：00	一日の確認
09：00 ～ 11：00	プロジェクト発表
11：10 ～ 12：30	全体振り返り
12：40	閉　　会

第１日目　第１回目：８月３日(水)/ 第２回目：８月 17 日(水)

【開会式・オリエンテーション】　　担当：川崎　典子（大分県国際協力推進員）

（1）ね ら い

・　プログラムの意義を全員で確認し、参加する意思を明確にする。

・　他校や関係者のことを知る。

（2）概　　要

13 時半より開場し、時間通り 14 時に開始した。

冒頭に JICA 九州よりプログラム開会の挨拶を、1 回目は市民参加協力課の本田課長、2 回目は村岡所長が行った。挨拶内容の概要は、JICA 事業の説明と MDGs についての紹介であった。

その後、参加者全員でプログラムの 3 つの目的、「世界を知る」、「国際協力について理解を深める」「様々な参加者と考え方や想いを共有して、生き方や価値観に触れる」「自分自身を見つめる」を確認した。

参加者に対して事前にパンフレットを配布してはいたものの、参加者が事前にプログラム全部を把握していなかったようであるが、参加者は一様に真剣な表情で、これからプログラムに臨もうという意気込みを感じることができた。

3 日間を過ごす上で関係性を確立するために、スタッフ全員の自己紹介を、「呼び名、派遣国、職種、趣味」を明記した紙を提示しながら行ったところ、参加者の反応は上々であった。

今回、学校紹介の時間を設けず壁新聞を作成することで対応し、各校全員で前に出て、学校名のみの紹介とした。

（進　　行）

（村岡所長挨拶）

（3）課題とその対応策

・　スタッフの自己紹介部分が長く、時間を超過したため要点のみに絞って端的に紹介するように改善を図った。

・　壁新聞で割愛した学校紹介であるが、お互いの学校のことをもっと知りたいというアンケート結果も出ており、今後、再検討が必要である。

（スタッフ自己紹介）

（学校紹介）

（学校紹介新聞１）

（学校紹介新聞２）

【アイスブレイキング】

担当：第１回・松尾（佐賀県国際協力推進員）／第２回・南（長崎県国際協力推進員）

(1) ね ら い

① 全体にどんな参加者がいるのかを参加者自身が知ること。

② グループメンバーとの交流を進めること。

③ グループワークの練習。

(2) 概　　要

～１回目～　松尾（佐賀県国際協力推進員）

・ ネームチェーン

制限時間１分間で呼ばれたい名前、あるいはニックネームで「あいうえお」順に並んで大きな円を作る。その後、順番に一人ずつ呼ばれたい名前を発表していく。この時に気になる名前はなかったかを参加者に尋ね、挙がった名前の由来を本人に尋ねるようにした。最後に、名札の空欄の部分にローマ字で呼ばれたい名前を記入してもらった。

・ グループづくり＆他己紹介

制限時間１分間で名札の裏に書かれているアルファベットを確認し、同じアルファベットの人を探し、グループを作る。他己紹介では、グループ内でペアをつくってもらい、一方がもう一方に制限時間内に質問をし、質問した相手のことについて他のメンバーに紹介してもらった。

質問内容：　① 県・学校は？

② 行ってみたい国は？その理由は？

③ 自由課題（好きな食べ物、得意な教科等）

・ 交流会準備

この後にある交流会用のイスと机のセッティングを各グループで行なった。

・ 人間コピー

グループ内の２名のみ絵（交流会に参加する研修員の出身国の写真）を見ることができ、他のメンバーに絵の詳細を伝え、他のメンバーは、その情報を元に用紙に描いていく。伝える側の二人は描くことは出来ないが、何度でも確認に行くことは可能である。鉛筆で下書きを行う慎重なグループもあったが、短い時間で絵の詳細をどう伝えるかということで、体を使って表現したりと工夫が見られた。

・ グループ名決め

最後にグループ名を話し合って決めてもらい、全体で発表をした。

～２回目～　南（長崎県国際協力推進員）

１回目との相違点

・ ネームチェーンでは、こちらで円の始点を予め設定して始め、大体１分以内で完成することが出来た。

・　ニックネームが見やすいように、首から下げる名札ではなく、シールを胸に貼るようにした。
・　ペアワーク（インタビュー）では、ルールの理解がすすむよう、ワークのデモンストレーションを行なった。
・　当日欠席者がいたため、奇数グループにはインターン生（大学生）に参加してもらった。
・　人間コピーでは、制限時間 10 分（実際には 7 分で打ち切り）とした。

（3）課題とその対応策

～1 回目～　松尾（佐賀県国際協力推進員）

・　ネームチェーンでは、並び始めがわかりにくく、並ぶのに時間がかかってしまった。
・　他己紹介では、こちらの説明不足により、グループによっては、1 人分のインタビュー時間内でお互いインタビューをしたところがあり、終了時間に関してグループ間で差が出てしまった。
・　時間の都合上、人間コピーあたりからプログラムの進行が速くなってしまった。

～2 回目～　南（長崎県国際協力推進員）

・　参加者全体と交流する機会は、プログラム全体を通してアイスブレイキングのみのた

（ネームチェーン作り 1）

（ネームチェーン作り２）

（インタビュー）

（人間コピー）

め、全体交流できるワークを盛り込む。

- たくさんのワークを実施することよりも、実施ワークを絞り込み、一つ一つに時間をかけるほうが、参加者の集中力が高まる。
- アイスブレイキング 60 分を短縮し、参加者の「もっと交流したい」という気持ちが芽生える程度で終了する。
- グループ内に３年生が多いと１年生は遠慮がちになってしまうなどが見受けられた。学校を分けるだけでなく、学年にも配慮したグループ分けを行う。

（4）参加者からの声

- 初め、気軽にどんどん自分から話していこうと思っていたが、案外そのようなことが出来ず、このまま２泊３日を無事に楽しく過ごすことが出来るだろうかと少し不安を抱いていたが、アイスブレイキングのお陰でグループのメンバーだけではなく、何人かの子と話すことが出来た。明日ももっと友達を増やして行きたい。
- このアイスブレイキングでは初対面の人とも緊張せずに話せたと思うので、とても楽しかった。

【クバーラ】

担当：橋口　恵利子（北九州国際協力推進員）

(1) ね ら い

・ プログラム内での最初のグループ活動となるため、アイスブレイクの一つとして緊張をほぐし、3日間共に過ごす仲間を知る機会とする。
・ 研修員と共にスポーツを行うことで、研修員との交流に慣れる。
・ クバーラに携わった協力隊員を通し、協力隊活動の一部を知る。

(2) 概　　要

～1回目～

まず、グループごとに整列してもらい、クバーラの大まかな概要を説明した。その後、JOCA 田渕職員（マダガスカル・青少年活動）が隊員時代に出演したクバーラのミニドキュメンタリーを全員で視聴。現地の遊びであったクバーラが、ある隊員の活動によってスポーツ化されたことや、マダガスカルの子どもたちの様子などを知ってもらった。

その後、田渕職員が登場。続いて JICA 長期研修員が登場し、グループに参加した。

ルール説明後、研修員・先生方も交えクバーラのゲームを開始。全員初めて行うスポーツとあって、最初は戸惑いながらゲームに参加していた生徒たちも、一回行うと単純だけど奥が深いクバーラの楽しさに気付いたようで、沢山の笑顔が見られるようになった。

ゲームに慣れたころに研修のため遅れての参加となった技術研修員が登場。全チーム研修員を交え、ゲームを続けた。得点が入るとチーム全員がハイタッチで喜ぶ姿に、生徒同士の距離・研修員との距離が一気に縮まったのがわかった。

最後に田渕職員による体験談を全員で聴講した。単にクバーラと言うスポーツを指導していたというのではなく、そこにある協力隊員としての想いを感じてもらった。熱心に耳を傾ける生徒・先生の姿が印象的であった。

【参加研修員】 JICA 長期研修員 2 名・JICA 技術研修員「中南米地域 中小企業・地場産業活性化」コース 14 名

～2回目～

１回目と同じ進行形態だったが、前半、田渕職員が参加できなかったため、ミニドキュメンタリー視聴後は JOCA 森川職員と田中職員でゲームを進行していただいた。前回行わなかった準備体操なども行い、また自分自身の体調管理に十分気をつけるようお願いした。

最後は前回と同じく体験談をお話していただくため田渕職員に登場していただいた。テレビに出ていた人が突然登場し、直にお話ししているという状況に驚いた生徒もいたようだ。今回も熱心に話を聞く生徒を見て、クバーラを実際に体験したことで、協力隊体験談を聞いた時の気持ちの入れ様が深くなっているのだろうと感じた。

【参加研修員】 JICA 長期研修員 3 名・JICA 技術研修員「消化技術」コース 7 名

（3）課題とその対応策

～1回目～

・　研修員が参加して以降、チームの団結力が急に増すようなので研修員の参加は良い起爆剤となったようだが、研修スケジュールの関係で2回に分けて投入しないといけない状況であった。1回目投入の研修員が2名（1グループ）と少なかったため、受け入れ側の生徒の方も「自分たちだけ良いのかな」と少し戸惑っていたようだ。研修員を入れるタイミングをうまく図る必要がある。

⇒　研修を早めに切り上げて頂くなど、研修スケジュールの都合をつけるのは難しい状況にあるため、いっぺんに投入した方が一気に盛り上がるのではないかと思われる。

～2回目～

・　クバーラの実体験を通して協力隊の活動や想いを知る今回の目的の1つに挙げている。来年度以降も同様の扱いでクバーラを行うとするならば、田渕職員がいなくても同職員のクバーラ・協力隊活動に対する想いを伝えられる方法を考える必要がある。

（4）参加者からの声

・　思っていたよりルールが簡単で驚いた。足が遅い速いに関係なく、誰にでもできるスポーツなのでとても良いと思った。ルールが簡単だったし、チームの皆と協力できたのでよかった。

・　クバーラのことを知るたび、好きになっていった。学校に帰ったら次のクラスマッチにするよう提案したいと思った。VTRを見て体育の重要さやスポーツについて考えさせられた。

・　マダガスカルで体育の授業がきちんと実施されておらず規律を学ぶ機会が少ないことを知って驚いた。思った以上に頭も体力も使うスポーツで楽しめた。異文化にふれられてよかったと思う。

・　田渕さんが現地の子供達のために様々な努力をして、大会が開催されるようになるまで子供達にクバーラを教えていたことを知り更にクバーラが好きになりました。

（田渕職員登場）

（研修員と初対面）

（準備運動）

（初クバーラ）

（作戦会議１）

（作戦会議２）

【JICA 研修員との交流】　　担当：古賀　知美（福岡市国際協力推進員）

(1) ね ら い

・ 研修員と交流することにより、異文化への理解を深める。
・ 言葉の通じない相手とコミュニケーションととる際にどのように気持ちを伝えるか・理解するかを考え、体験する。また、通じあった時の喜びや楽しさを体感する。
・ 心で聞く・話す気持ちの大切さに気付いてもらう。その姿勢は日本での生活でも大切なことだと気付かせる。

(2) 概　　要

各テーブルに JICA 研修員の出身国の国旗、風景などの写真を配置し、それを元にグループ毎に着席してもらい、JICA 研修員についての説明を行なった。

その後、約 5 分間各テーブルで自己紹介（高校生は英語、JICA 研修員は名前と専門を日本語で）を行なった。自己紹介終了後は約 10 分間で研修員の国について国旗やテーブルを元に自由に会話をする時間とした。

10 分間の会話終了後、各国の食事情（食文化）を研修員にインタビューし、それを描く「手書き写真」を行なった。1 回目は食事情全体の中からひとつテーマを選んで行なったが、2 回目は伝統料理をテーマとして行なった。完成した「手書き写真」は夕食会の最後にグループ毎に発表した。

短い時間の中で、参加者には言葉だけではなく肌で交流するということを感じさせることが出来た。

(3) 課題とその対応策

・ 1 回目に関して、クバーラ後の着替えの時間を確保して行わせるべきであった。
・ 昨年度に比べ研修員の食事情をインタビューし絵に描く作業が短く、30 分で終えることができるかが懸念材料であった。1 回目については時間配分が悪く、15 分程時間が押したが、2 回目は 30 分以内で作業を終えているグループが多かった。2 回目に関しては、クバーラに早いタイミングで参加した研修員が多かったため、グループに溶け込むのが早かったのが、作業を 30 分で終えられた要因であると考える。また作業時間のマネージメントについては、終了 15 分前から 5 分ごとに声掛けを行うことが効果的であった。
・ 食器等の片付けや、遠方から来ていただいた研修員もいるため、時間厳守には気をつけなくてはならない。

(4) 参加者からの声

・ 英語が話せなかったので、どのようにコミュニケーションを取っていいかわからずとまどっていましたが、ジェスチャーなどで一生懸命に伝えたら気持ちが伝わって、すごく嬉しかった。

・　私の班の JICA 研修員の方はチリの方だったのですが、すごく陽気で気さくな方だったので、凄く仲良くなれて凄く幸せだった。また、各国の文化や地理等を知れて、凄く充実したものでした。できるなら、もう一回したいくらい。
・　外国の人と話すときに必要なのは英語だけではないということが分かった。
・　なかなか英語を話せずに困っていたが、JICA 研修員の方が声を掛けて下さって嬉しかった。

(5) そ の 他

・　参加研修員出身国 ≪１回目≫
　（技術研修員 15 名）アルゼンチン２名、ボリビア１名、チリ２名、コロンビア４名、エクアドル１名、ニカラグア２名、パラグアイ１名、ペルー２名
　（長期研修員２名）　中華人民共和国２名
・　参加研修員出身国 ≪２回目≫
　（技術研修員７名）　アルメニア１名、クック諸島１名、フィジー２名、ウルグアイ１名、ザンビア２名、
　（長期研修員３名）　モザンビーク１名、ベトナム１名

（研修員の出身国について座談１）

（研修員の出身国について座談２）

（食文化の描写１）

（食文化の描写２）

【交流夕食会】

担当：古賀　知美（福岡市国際協力推進員）

(1) ね ら い

・ 研修員と世界各国の料理を味わうことによって、食文化の違いや習慣を理解する。
・ 協力隊 OBOG である推進員の任国料理を味わってもらうことで、翌日に行う協力隊体験談のイメージづくりとする。

(2) 概　　要

JICA 研修員との交流プログラムに引き続き、研修員も交えた夕食会を行った。メニューは各県推進員が協力隊員として実際に任国で食べていた世界各国の料理とした。食事を初めて前半に各料理の説明を各推進員が行なった。現地で手を使って食べている料理に関しては、説明の際に実際に手で食べてみせ、参加者にも手で食べてみるように促し、普段とは違った異文化体験をしてもらった。

今回は 6 カ国の料理を準備したが、やはりどの料理も食材が現地のものと異なるため多少味に違いがあった。

1 回目は夕食会終了後、2 回目は夕食会の中に交流会で作成した研修員の国の食事情（食文化）について各グループ約 3 分間発表を行なった。

＜メニューについては以下の通り＞

① ブーニャ／肉とイモのココナッツミルク煮［大洋州：川崎推進員（バヌアツ）］
② ベシパルマック／うどんの羊肉スープかけ［中央アジア：古賀推進員（キルギス）］
③ ナシゴレン／焼き飯［東南アジア：崎田推進員（インドネシア）］
④ ピケマッチョ／ポテトフライの焼き肉のせ［中南米：橋口推進員（ボリビア）］
⑤ サンドイッチベニノア／ベナンのサンドイッチ［アフリカ：松尾推進員（ベナン）］
※ 1 回目のみ
⑥ 現地語名不明／トマトソースとご飯［アフリカ：力竹推進員（ニジェール）］
⑦ そのほか、サンドイッチ・フルーツなど

(3) 課題とその対応策

・ 料理については、各国の料理を味わうことができるということで好評だったが、人数に対しての料理の量の配分が難しく余ってしまう料理もあった。対応策として 1 回目に多く余ったベナンのサンドイッチについては 2 回目のメニューから外した。
・ 国際協力について、また 2 日目に貧困というテーマで学習するにも関わらず夕食会の料理を残してしまうことはプログラムの主旨を考えると適切ではない。来年度はそのような点も踏まえ料理の内容などを改めて考えていく必要がある。
・ 交流会と同様、クバーラの時間である程度高校生と JICA 研修員との関係ができていたため、夕食会では大きな支障もなく交流することができた。

（4）参加者からの声

・　手で食べるのは初め抵抗があったけど、おはしで食べるときより、美味しく感じることが出来た。

・　研修員の方々とお話できたのは楽しかったし、様々な国の料理を食べられたのもおもしろかった。特に手でごはんを食べたことは初めての体験でおもしろかった。ココナッツミルクを使った料理を食べたことが無かったのでとても印象に残っている。

・　よく小倉に牛丼を食べに行くそうなので、「つゆだく」という言葉を教えたら喜んでくれて、試してみると言ってくれた。

（交流夕食会の様子１）

（交流夕食会の様子２）

（交流夕食会の様子３）

（交流夕食会の様子４）

第２日目　第１回目：８月４日(木)/ 第２回目：８月 18 日(木)

【体操「やきとりじいさん」】

担当：川崎　典子（大分県国際協力推進員）

(1) ね ら い

・ ２日目のアイスブレイクの目的も取り入れ、全員で参加できる活動とした。
・「バヌアツ」の体育教師隊員が体操を開発したことを紹介することで、世界の中の一つの国として「バヌアツ」に興味関心を持ってもらえるように工夫した。
・「やきとりじいさん」の歌が福島のやきとりをＰＲするために作られたものであることを紹介することで、東日本震災にも触れるようにした。

(2) 概　　要

～１回目～

まず、「夏休みの朝の体操をしよう」という呼び掛けで、推進員全員が前に立ち、ＤＶＤ映像を上映しながら「やきとりじいさん」を体操して見せた。デモンストレーション終了後、「バヌアツ」の隊員が帰国後に体操を編み出したことを紹介するとともに、「やきとりじいさん」の歌は福島の焼き鳥をＰＲするために作られたという背景を紹介し、東日本震災とも関連付けた。

最後に全員に参加を促し、一度だけ体操を実施。会場が運動するには狭いという問題もあったが、参加生徒はもちろん先生方も積極的に体操に取り組んでいた。

～２回目～

１回目と同様、体操は１回の実施に留めた。「もう一度しますか」という問いに一部「したい」という声もあったが、所要時間を考えて採用せずに終わりにした。

恥ずかしさが先に立ち、動きが悪くなってしまいがちな生徒の気分を上げるために、各体操の意味合いを説明しながら積極的に動かすように呼びかけ、積極的な参加を促した。

(3) 課題とその対応策

～１回目～

・ 本来全員での体操は２回実施する予定であったが、参加者のやる気や様子を見て１回に留めた。
　⇒　体験するという程度に留めることにしたため、１回の実施で十分であった。

～２回目～

・ １回目同様、実施は１回に留めた。その結果次のプログラムへの引き渡しが早まり、スムースな受け渡しができずに間が生まれてしまった。
　⇒　次の担当者との打合せをしっかりとしておくべきであった。感想を聞くなど、時間を上手く使う工夫が必要であった。

（4）参加者からの声

・　最初このプログラムを見たとき、どんな体操か全く想像できなかった。実際やってみると、楽しく感じた。動きに１つ１つちゃんと意味があり、体にいい体操だと知った。帰ったら学校の友達に紹介したい。

・　正直２回では足りなかった。もっと踊りたかった。帰って発表する時、踊りを完璧にして発表しようと思う。

（焼鳥じいさん体操１）

（焼鳥じいさん体操２）

【協力隊体験談】

担当：松尾（佐賀県国際協力推進員）

(1) ね ら い

・ 違う職種の複数の協力隊体験談を聞き、各任国の様子、活動について理解する。
・ 複数の協力隊体験談から、現地でどのような活動を行い、現地の人たちとどのように関わっていくかを考え、活動計画づくりに活かす。

(2) 概　　要

はじめに、派遣地域・職種が違う4名の協力隊経験者（① 安田智恵子　6-2　スリランカ　音楽　② 田中雅史　20-2　ザンビア　村落開発普及員　③ 橋口恵利子　18-1　ボリビア　視聴覚教育　④ 森川大毅　19-2　バヌアツ　小学校教諭）の方を簡単に紹介した。その後、グループ内でどの講師の話を聞きに行くかを決定してもらい、それぞれの講師のもとへ移動をしてもらった。各講師は、各々の方法で20分間の体験談を行った。20分間という短い時間なので、大まかな話す内容は事前に知らせておき、5分程度で任国・任地の概要（位置、面積、人口、言葉、宗教、食べ物、町並みなど）を、残りの時間で、活動について（協力隊に参加して理由、配属先と活動内容、2年間の活動で感じたこと、得られたこと、国際協力に係るために大事なこと）の話と、統一した。発表後、5分間の質疑応答の時間を設けた。

発表終了後再度、グループごとの状態に戻し、自分が聞いてきた内容を一人につき3分間で他のメンバーと共有した。この情報共有を行いやすくするために、事前に「共有メモ」を渡し、体験談を聞きながら、その用紙に得た情報を記入してもらった。

最後に、4人の講師に対しての全体的な質疑応答の時間を設け、「帰りたかったことはありますか」「（スリランカ隊員に対して）民主主義とはどんな感じですか」「語学はどこで学ぶのですか。どうすれば身につきやすいですか」などの質問が挙がり、各講師がそれぞれの体験を基に丁寧に回答した。

(3) 課題とその対応策

・ 聞いた話を他のメンバーに情報共有をするということで、メモをとるのに必死で下を向いたままの生徒が多く見受けられた。改善策として、2回目は、できるだけメモを取らなくて済むように国・任地の概要は配布とし、「共有メモ」の改善も行なったが、配布しても、説明の時間は必要で、配布物を用意したことで、逆に話しづらかったとの意見が講師の中から出ていた。
・ 1回目の「活動計画づくり」のプログラムで、「どこで誰と活動を行うのか、誰を対象に行うのか」ということがはっきりしていない生徒が多かったため、2回目の体験談では、「誰とどこで誰に向けて活動をおこなったのか」をより強調するようにし、活動内容の中に苦労話など、なかなか活動はうまくいかないという話も盛り込むようにした。
・ 20分という短い時間で、国の概要から活動までと話をしてほしいポイントが多かっ

たため、構成づくりが難しくなってしまった。今後、時間と話す内容をもう一度検討する必要がある。

・ 体験談へ入り易くするため、このあとの「活動計画づくり」で話している「青年海外協力隊」の説明を協力隊体験談の冒頭で行なうべきであった。

（4）参加者からの声

・ 色々な職種があって、興味がある職種の話を聞けてよかった。知りたかったことや青年海外協力隊についての知識が増えて良い時間だった。

・ 私はボリビアについてお話を聞き、２年間その国で何かプロジェクトを実行して、実らせるには思いもよらない意見の違いや、知識の考え方の違いなど、文化の違いで、センスも何もかも合わないことが日常茶飯事で、でもそれを理解することと、１番大事なのは、それを互いに認め合うことだと知った。民族衣装が凄く可愛くて着てみたいと思った。もっと協力隊体験談を聞きたかった。思い描いていた「発展途上国」という印象は凄く小さくて、全く分かっていなかったのだと思った。新鮮で新感覚なことがたくさんだった。学ぶ機会を与えていただきありがとうございました。

・ 写真を使って分かりやすく説明してくださった。ねずみやこうもりを食べている国も

（ボリビア　橋口さん）

（タイ　安田さん）

（ザンビア　田中さん）

（ボツワナ　森川さん）

あって凄く驚いた。食べ物だけではなく、ことばや、様々な文化も違う国に行って、その国のために２年間働くというのは本当に大変なことだと思う。でも、その貧しい国にも良いところがあり、異国の地で働くことで何か大切なことを得られるのだと思う。

【ワークショップ】

担当：木下　俊和（熊本県国際協力推進員）

(1) ね ら い

「貧困」とはどんな状態であるかを考えさせることにより、途上国が抱える問題を知ることを目的とし、メインプログラムにおいてバラエティに富んだアイデアが出ることを期待した。

(2) 概　　要

・ アイスブレイク

パプアニューギニアの山間部の村の写真を用いて、部屋の４隅を使い、「世界の国の数」、「先進国と途上国の数」、「途上国で暮らす人の数」をクイズ形式で確認した。「ミレニアム開発目標」について触れ、途上国が抱える問題点について認識させた。

・ ウェビング（派生図づくり）　キーワード：「貧困」

ミレニアム開発目標が取り上げている問題の中から「貧困」という言葉をキーワードとして派生図を書かせた。貧困とは、「どういうこと？」「どんな状態？」「何が困っている？」など自由に書かせ、完成したら他のグループの派生図と比較させ、自分のグループとの違いを確認させた。

※１回目は、派生図の説明をグループごとに行ったが２回目はカフェ方式で行なった。

・ 貧困の輪

「貧困」「栄養が十分とれない」「栄養不良になる」「学校に行けない」「能力や技術が身に付かない」「仕事がみつからない」「収入が足りない」「健康を損なう」の８つの言葉を使い、それぞれの言葉がどのようにつながっているのか、「貧困の輪」を作成させた。

・ 貧困の輪の断ち切り

グループごとにつくった「貧困の輪」を断ち切るために、どこをどう断ち切ればよいのかを話しあわせ断ち切りを行わせた。断ち切る場所、数は自由とした。その後、「貧困の輪」、「断ち切る場所」、方法をグループごとに発表を行い意見の共有をした。

・ ま と め

貧困に関連する写真と人間開発指標をピックアップし、先進国、中進国、途上国間の格差を知らしめるとともに、事前の体験談の内容や途上国の状況などを踏まえ、国際協力を実施する上で、「ただ援助すればいいのか？」、一方的な援助だけではなく、相互協力であることを投げかけた。

(3) 課題とその対応策

途上国の現状について知るという点では、問題ないと考えるが、果たしてその実情をふまえて、メインプログラムに臨んでいるのかが疑問である。また、協力隊員として国際協力を行う上で、一方的な援助ではなく、現地の人々の自立を促すことが重要であることを理解させるような内容が必要ではないかと考える。この点において、今回のワークが十分

であったのか課題が残ったと考える。

（4）参加者からの声

・　世界の人口が約６８億人に対し、開発途上国で暮らしている人は５５億人もいるという事を知って、自分はほんの一握りの人間であることを実感しました。あと、１番驚いたのは１日１．２５ドル以下で暮らしている人が、日本は0%なのに、インドでは41.6%タンザニアは88.5%もいるということです。

（5）添付資料

＊パワーポイントのスライドおよび「貧困の輪」作成資料

（導入部分）

（発表１）

（「貧困」でウェビング）

（発表２）

【青年海外協力隊計画作り】

担当：力竹（鹿児島県国際協力推進員）、崎田（宮崎県国際協力推進員）

(1) ね ら い

・ 参加者自身が青年海外協力隊員として開発時途上国に派遣されると想定して、現地の課題に対する２年間の活動計画を作成し、現地の人々にとってよりよい解決方法を考えることを通し、国際協力を行う上で大切な視点を気付かせる。

(2) 概　　要

まず力竹推進員が、日々の生活でとても身近にある携帯電話の部品やその製造過程について、開発途上国が関わり、時には児童労働や原料をめぐる争奪戦といった問題を引き起こしているということを話した。そして国際協力について考えるときに、日本に関係のない国の問題としてとらえるのではなく、同じ地球に住む自分たちに関係のある人々のこととして考えながら、協力隊活動計画作りに臨んでほしいということを伝えた。

また、青年海外協力隊の基本的な活動形態として「活動期間は２年間」「お金は使えない」「現地の言葉を使って活動する」ということ、協力隊には約 120 もの様々な職種があり、その中からグループごとに職種を選んで活動計画作りをすすめていくことなどの説明を行なった。

次に崎田推進員が､活動計画作りの舞台となる『ソラバスタ国サニー村』の紹介を行なった。ソラバスタ国サニー村は東ティモールをモデルとした架空の国・村で、各推進員が隊員時代に派遣されていた任地の良い点・課題点などを無理がない範囲で入れ込み作り上げたものである。

地図でソラバスタ国の位置を確認し、グループ内で写真を見てイメージをふくらまし、気づいたことなどを挙げてもらった。その後、村にはどのような人がいるか、どんな仕事をしているかを考えてもらい、村長や先生、農民、商人、医者、看護師など発表者にはその役になってもらい､参加者とスタッフで村を再現した。また､村の関係者がある程度揃ったところで、その村で起こる出来事をスタッフと数名の生徒にも協力してもらって寸劇で再現した。

～寸劇の内容は以下の通り～

① メッカに向かってお祈り（イスラム教）
② 水汲みをする女の子（女の子の家庭での仕事量・衛生的ではない水）
③ 市場での出来事（ゴミ捨て・児童労働）
④ 診療所での出来事（医療事情・識字率）
⑤ 病院での出来事（栄養）
⑥ 役場の休憩時間（隊員登場、ゴミ問題）

※それぞれの寸劇には村の特徴や問題点を織り交ぜた。

さらに配布されたサニー村の概要をグループごとに読み込みをさせ、村の良い点・問題点を書き出し、全員で共有した。

その後、ここまでのワークを踏まえて「活動計画作り」に取り掛かるための作成のポイントなどを説明。作成したプロジェクトは翌日発表をすること、発表の相手は村人だという設定で（1）実現可能性　（2）持続可能性　（3）有効性　（4）説得力という観点から評価される点を伝え「活動計画作り」に取り掛からせた。

計画作りの途中で、崎田推進員がソラバスタ国にインタビューに行ったという設定で作成したビデオを上映。内容は隊員がいる村の村人にその様子を聞き「言葉も上手になって楽しく活動しているわ」という肯定的なもの、「別に自分たちの収入になるわけじゃないからあまり関係ない」といった無関心な意見、「今後環境の面で指導してくれる専門家がほしい」という提案などを盛り込んだ。また、ソラバスタ国から帰国した隊員 OB へのインタビューで「村人の理解がなかなか得られなくて苦労した」という意見も盛り込み、村人、隊員それぞれの言葉から、自分達の計画を見つめ直す機会とした。

推進員やスタッフは、隊員の活動があまりイメージできていないグループや活動内容を決めかねているグループに対して「その隊員は誰と活動するのか」「もともと改善したいと思った課題に立ち返ってみて」という助言などを行った。

（3）課題とその対応策

～1回目～

・　どこまで計画作りに介入していいかわからないスタッフが多かった。
　⇒　スタッフの介入は、その場の雰囲気で程度を決めていくしかないが、スタッフ間の共通理解は常に図りながら進めていく必要がある。

・　良い点、問題点などに時間を取りすぎ生徒たちが疲れていた。
　⇒　グループごとの発表にはあまり時間を割かないようにした。

・　ビデオ再生の時に字幕が見え難くかった。
　⇒　2回目はデータを修正し、ビデオを見る際もできるだけ前で見るように促した。

～2回目～

・　スタッフが介入しすぎ混乱するグループが見受けられた。

（4）参加者からの声

・　現地の人々の気持ちになって考えるということはとても大切だと思った。日本では簡単に出来ることでも現地では通用しなさそうなことがたくさんあった。日本ではなく、現地で出来ることを考えなければ意味がないことが分かった。自分がどんなに恵まれた環境にいるのかを改めて思い知らされた。5年後はどうなっているか等を班で考え、プロジェクトを考えることで色々な問題がでてきて、それを自分達でどうやって行動すればその問題点を改善することが出来るのかを考えたことでプロジェクト作成の難しさ、どうやって人々に分かり易く教えられるか等のことを真剣に考えさせられることができたので良かった。

・　1つ解決すれば、問題がでてきて、なかなか前に進めずに苦戦した。色々な情報提供をしてくださったので活動を順調に進めることが出来た。

・　派遣された地域であれもこれもしたいと思っていたとしても、お金もないし、期間も２年間と短いし、できることが限られてくる。そんな中で、地域の状況をふまえながら自分にできることをやることがどれだけ大変で難しいかということがわかった。また自分では当たり前のことを、何も知らない人たちに説明して理解してもらうように

＜第１回目　活動計画作成の様子＞

することの大変さも学んだ。

・　どんな活動をするかについて、2日間しか関わっていない人たちということを忘れて、たくさん自分自身の意見を出し合えてとても刺激になりました。

＜第２回目　活動計画作成の様子＞

第３日目　第１回目：８月５日(金)/ 第２回目：８月 19 日(金)

【青年海外協力隊活動計画　発表】

担当：力竹（鹿児島県国際協力推進員）、崎田（宮崎県国際協力推進員）

(1) ね ら い

・　前日行った『青年海外協力隊活動計画作り』で作成した活動計画を発表し皆で共有する。

(2) 概　　要

発表前に ① グループ４分以内　② 全員が話す　③ 模造紙に書いてあることだけを読むのではなく、なぜその活動に決定したかなどの経費も含めて発表する、そして村人へ向けてというルールの確認を行なった。発表を聞く参加者やスタッフは、評価のポイントが書かれた評価シートにコメントを記入し、それらをもとに質疑応答を行なった。

発表者は現地の言葉で挨拶をしたり､劇で説明をしたりするなど工夫を取り入れながら、活動計画を発表した。

グループごとに環境衛生、教育、観光促進、組合設立など着眼点も様々であった。

質疑応答では、経費がかかる活動に対しての質問などが挙げられ、模造紙に書かれていない背景を説明することで、より具体的なイメージが掴めていたようだ。

発表後、評価シートに基づいて参加者及びスタッフ、JICA 職員が投票を行い、参加者からの投票数が一番多かった活動には優秀賞、スタッフ及び JICA 関係者からの投票が一番多かった活動には JICA 賞が贈られた。

その後 JICA 九州の田中職員より講評をいただき、それぞれの活動について似たような活動を実際にしている隊員の紹介や、もし現実にそれらの活動に取り組んだ場合に想定される課題などを解説にいただいた。

最後に崎田推進員が、このソラバスタ国サニー村は実際にはない架空の村であるということを参加者に伝え、しかし似たような国が世界中にあり同じような課題を抱えていることや、モデルとした東ティモールという国が人権侵害を受け、多くの人々の心に傷を残した歴史や、崎田推進員が青年海外協力隊としてインドネシアで栄養士の活動してきた時の様子を伝えた。

最後に今回のサニー村でのプロジェクト作成を通して考えたこと、感じたことが高校生の皆さんのこれからの生きるヒント、国際協力への見方が変化してくれればという思いを伝え締めくくった。

(3) 課題とその対応策

・　１・２回目とも時間がオーバーした。

　⇒　開始時間を早めることが必要。

（4）参加者からの声

- 自分達の考えたプロジェクトにたくさん質問されて困った。自分達の考えは浅かったなと思った。でもそうやって追求するのは楽しかった。
- 賞を取る事はできなかったけど本気で他の国に協力できることについて考えられて良かった。
- 最後のセリフメインだったのに噛んでしまってとても残念。
- 他の班とは何か違ったことがやってみたくて劇をすることにしました。ただ計画を伝えるだけでなく、伝え方の工夫の大切さを知りました。
- 各グループ同じものが一つもなくてみんなの意見を聞くのが楽しかったです。

（1 回目　発表の様子）

（1 回目　表彰式）

（2 回目　発表の様子）

（2 回目　表彰式）

【閉会式・ふりかえり】　　担当：川崎　典子（大分県国際協力推進員）

(1) ね ら い

・　プログラム全体を全員で振り返り、今後の自分自身の生き方を見つめなおす。

(2) 概　　要

1回目は前プログラムからの引き継ぎが時間通りに進み、10分の休憩をはさんで11：20に開始することができた（但し、終了時刻は12：25まで延長）。2回目は前プログラムが長引いてしまい、休憩をはさんで11：30からの開始となった（但し、終了時刻は12：20まで延長）。

学校ごとの着席に戻ってもらい閉会式を開始した。

冒頭に、閉会の挨拶として、JICA九州の村岡所長（1回目）と吉田次長（2回目）にご挨拶を頂き、ご自身たちが国際協力に携わる中で気づかれたことを紹介した。

次に、事前学習で課題にした「国際協力」のウェビングを再度学校ごとに10分間で実施した。作業終了後に事前学習で作成したウェビングを学校ごとに配布し、プログラム参加前と参加後の比較を行なった。参加後新しく加わった言葉を探し出してもらい、各自1つずつ読み上げ全体で共有させた。

次に3日間を通して感じたことを共有した。1回目はアンケート用紙に感想を書く作業を入れたため、非常に多くの生徒が感想を発表してくれたが、2回目は書く作業を割愛して発表のみを促したため、3名の感想発表に留まった。

次に、「自分自身を見つめる」という目的にかなうよう、『自分への手紙』を書く作業を取り入れた。（しかしながら、2回目は時間に追われていた為手紙を割愛。）

『自分への手紙』に関しては発表する時間は設けず、後日推進員より渡す流れとなることを説明するのみにとどめた。

最後に推進員全員の想いを伝えるため、「日常に戻っても世界に目を向け続けてほしい」「新聞やテレビや教科書や本だけじゃなく他人と積極的に触れ合って学んでほしい」「自分たちの生活が世界（開発途上国）とつながっていることを意識して暮らしてほしい」これら3つのメッセージを受け取って各地に戻っていくよう締めくくった。

JOCA九州より全員に対して最終的な注意事項の確認をし、教員を含めた全員での記念撮影で終了とした。

(3) 課題とその対応策

・　書く作業が多く、終了時刻が定刻より延長した。

　⇒　1回目の反省を生かして､2回目には「感想を書く」作業を取り入れないようした。

・　ウェビングの変化をしっかりと受け止める時間を設けなかった。

　⇒　1回目の反省を生かして、2回目には確認の時間を設けた。

・　予定していた『自分への手紙』を割愛した。

　⇒　とりまとめ役の重要なふりかえりの役目として重要事項を飛ばさないようにしな

ければならない。帰宅のために終了時刻を気にされる教員が多く終了時刻は守らねばならないため、前プログラムとの担当者と時間調整を図ることが重要である。

（4）参加者からの声

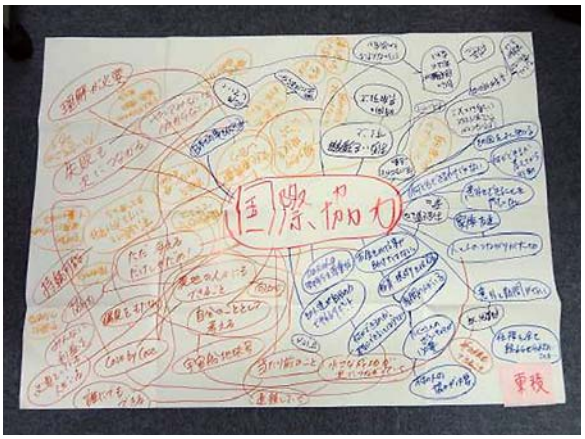
- プログラムに参加する前に書いたウェビングとプログラムが終わる前のウェビングを比べられて進歩がよく分かった。
- ウェビングの書く量が増えたと思う。

（閉会の挨拶１）

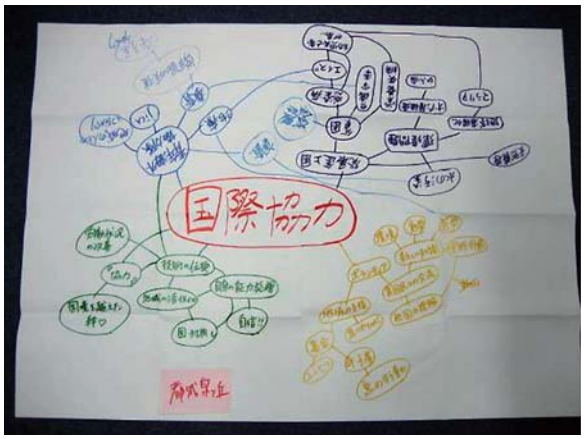
（閉会の挨拶２）

（ウェビングワーク１）

（ウェビングワーク２）



（熊本県立東稜高校）



（宮崎県立都城泉ヶ丘高校）

高校生国際協力実体験プログラム　参加校一覧

＜第１回目：８月３日（水）～８月５日（金）　計 42 名＞

	県	学校名	生徒	教員
1	福　　岡	福岡県立小倉南高等学校	3 名	1 名
2	佐　　賀	佐賀県立武雄高等学校	4 名	1 名
3	熊　　本	熊本県立多良木高等学校	4 名	1 名
4	熊　　本	熊本県立東稜高等学校	4 名	1 名
5	宮　　崎	宮崎県立都城泉ヶ丘高等学校	4 名	1 名
6	宮　　崎	宮崎県立高鍋高等学校	4 名	1 名
7	鹿 児 島	私立鳳凰高等学校	3 名	1 名
8	鹿 児 島	私立純心女子高等学校	4 名	1 名
9	鹿 児 島	鹿児島県立武岡台高等学校	3 名	1 名
小　　計			33 名	9 名

＜第２回目：８月１７日（水）～８月 19 日（金）　計 39 名＞

	県	学校名	生徒	教員
1	福　　岡	福岡県立福岡高等学校	4 名	1 名
2	福　　岡	福岡県立ひびき高等学校	3 名	1 名
3	長　　崎	長崎県立島原商業高等学校	4 名	1 名
4	長　　崎	長崎県立長崎北陽台高等学校	4 名	1 名
5	大　　分	大分県立大分上野丘高等学校	4 名	1 名
6	熊　　本	熊本県立御船高等学校	4 名	1 名
7	鹿 児 島	鹿児島県立垂水高等学校	4 名	1 名
8	鹿 児 島	私立鹿児島情報高等学校	4 名	1 名
小　　計			31 名	8 名

ジャイカ
JICA